

Philippines

カネパッケージ CSR活動を推進



植林した木々は大きく成長している

カネパッケージ(埼玉県入間市、金坂良一社長)は、各種緩衝材(梱包材)の設計・試験・製造・販売を手がけるメーカー。1996年のフィリピンへの拠点進出以降、本業のかたわら、フィリピンにおいて企業の社会的責任(CSR)活動に力を入れている。植林など環境貢献活動を皮切りに、さまざまなボランティアや寄付を通じ現地のインフラ整備や「地域の経済圏」の構築に一役買うなど、大きな役割を果たしている。今回、同社の活動の中心地であるフィリピンのオランゴ島とバナコン島でのCSR活動取材、また現地法人や工場の様子、従業員の声などをお届けする。



マングローブ植林を中心的に支える社員と島の住民

成長を続けるフィリピン6拠点

フィリピン製造現場の様子

意欲的に仕事に取り組む社員たち

カネパッケージは、フィリピンに「KPグループフィリピン」・「カネパッケージ フィリピン(LAGUNA・CEBU・CAVITE・LIMA各工場)」・「スーパー・フレックス・ロジスティック」の計6拠点を設けている。各拠点で大勢の現地社員を雇用しており、フィリピン進出をしている日系企業の製品の梱包を手がける。基本的なビジネスモデルとして「ファブレスを確立し、梱包材の製造には協力会社の力を借りることで、設計開発・提案営業に注力し、フットワーク軽く動ける体制を作り上げている。取引先からは短い納期の中の丁寧な仕事ぶりや、臨機応変で柔軟な部分が高い評価されている。これも金坂社長がフィリピンの現地責任者として赴任していた頃から築きあげた、協力会社との信頼関係や現在までにしっかり育ててきた社員教育の賜といえる。各拠点の社員も口々に「仕事へのやりがいを感じ、毎日にチャレンジが次の日の糧になっている」、「オープンな社風で職場の人間関係が良く働きやすい」、「一人一人の裁量が大きく仕事楽しい」など、仕事の楽しさを語るなど士気の高さがうかがえる。

オランゴ島ヘルスクリニック寄贈

「驚きと感動をあたえる」をモットーに本業を手がけてきたカネパッケージが、CSR活動を本格化して約20年。これからの数十年先を見据えて「活動の輪」を広げていく。

環境・生態系を崩さない植林活動に挑戦

まずは、フィリピンの自然環境省に保護されている指定地域100カ所の中で植林をさせてもらう許可を取り、活動初年はラブラブ市オランゴ島に決まった。ここは、渡り鳥の飛来地であるラグーンを守るためにフィリピンで初めてラムサール条約を適合した保護区となっていた。マングローブの植林がCO₂の吸収と酸素の創出だけでなく、ゆくゆくは海岸線の浸食からの保護津波防護林としての機能水質浄化・魚介類の産卵繁殖促進・渡り鳥の食料補給基地創出といった複合的な結果を生み出すことを期待した結果だ。

さて、実際にマングローブの植林は人間の手がかなりかかる大変な作業だ。マングローブの種は、水中に落ちてでも殆どが流されてしまい、その中で自然に発芽するのは1%以下と言われる。そこで植林に使うのは、落ちた種を拾ったもので、種集めや植林後の着床育成のためのメンテナンスやパトロールなどは現地(ローカル)の人を雇った。コストは一本あたり高くないが、環境保護などの理由から漁業以外の仕事が無いローカルの人々にとっては新たな雇用と収入源が同時にできたのだ。その

島全体のインフラを整えることを目標に

植林活動だけに留まらず、ほかにも活動は幅広い。マングローブの管理などで雇用環境を作った以上、働く島民の子どもを預かることのできる保育園や幼稚園、学校などの建設を開始。そして、ラブラブ市オランゴ島サンビセンテ地区に

後2011年にバナコン島2013年タンジヤイ市・2017年パディアン・2019年ビナルバガンなどに現在までに合わせて約270ヘクタールの領域への植林に成功している。

併せて金坂社長は、素人考えて植林を「過度にやりすぎる」ことで植生や環境を逆に乱したりしないように考えた。フィリピンの大学院でマングローブの研究をしている人を社員として雇い、自然環境省の役人や技術者とタイアップを敢行。かつ埼玉大学の教授と産学交流を持ち、きちんと植林が環境貢献できているか、地形や水の流れ、土壌、水質の変化を細かく確認してもらおうようにして、生態系や環境を悪化させないようにした。

植林活動だけに留まらず、ほかにも活動は幅広い。マングローブの管理などで雇用環境を作った以上、働く島民の子どもを預かることのできる保育園や幼稚園、学校などの建設を開始。そして、ラブラブ市オランゴ島サンビセンテ地区に

はヘルスケアセンターを新設した。センターは、内科・歯科などについて、フィリピンの他地域から週に1、2度訪れるボランティアの医師が診察する。定期的な医師団の派遣や、将来的に充実した医療サービスを提供できるように、医師の雇用もしている。

これまで島には中・小規模な医療機関がなく、病院は診察代が高いためかかりにくかった。その結果、小さい子供の緊急を要する重篤な病気を診察することができず悲劇を生むことがあったという。今回のセンター開設により、島民が診察や治療を受けられ、大きな病院に行く必要があるかの見極めなど、医師が早い段階で適切に判断できる。

金坂社長は「島の経済・教育・医療をサポートできるように、この循環をしっかりと作り上げたい」と期待をふくらませる。ヘルスケアセンターの寄贈時には、オープンングセレモニーやマングローブ植林活動も行

環境貢献と恩返ししのCSR活動

CSR活動の中でも特に注力してきたのが「マングローブの植林活動」だ。活動開始のきっかけは、金坂社長が高尾山に登った際、ある芸能人が杉の苗を寄付する植林活動を行っていたことが印象的で、「当社でも継続的に同じような活動ができないだろうか」と思ったことだった。折しも2000年代のフィリピン

では、1990年代に日系の商社や業者がエビの養殖域を沢山作るためにマングローブを大量伐採・破壊したことで減少。そのほか、成長速度が速いこと、植林に必要な現地の人々の人件費も安く、マングローブの植林を優先しての養殖で破壊されたマングローブの再生と同社のオペレーションを通して排

出す二酸化炭素(CO₂)のオフセットを目的とし、併せて「お世話になっている地域・人になにか恩返しをしたい」という目標を掲げた。実際、植林を開始したのは2009年だが、2008年のリーマンショックもあり社内での承認を得ることに苦戦したという。それでも、絶対に本業で赤字を出さず年商の0.1%を活動資金として拠出する、企業の士気もきつと上がるといって説得のもと、活動はスタートを切った。

そして金坂社長が活動で大切にしているのが「さまざまな人に植林に携わってもらうことで、植林を通じて驚きと感動を味わってもらいたい」という心意気だ。植林は同社の社員をはじめ、海外現地法人に勤める従業員など幅広く参加している。参加者は口々に「良い体験であり、今後も続けていくことに賛成だ」と話すなど良い効果が社内にも波及している。さらに

昨今は、取引先企業や関係のある企業も植林体験に参加し、カネパッケージのCSR活動への理解を深めるとともに深い信頼関係の構築にもつながっている。

2025年には取引先の企業と、フィリピンでのマングローブの推定炭素蓄積量の測定・算定方法の確立を開始。カーボンクレジット制度策定に向けて同国政府機関と調整などを進めている。2026年度内のフ

植林を通じて驚きと感動を伝える

フィリピンでマングローブ林によるCO₂測定算出手順の検証と確立を計画しており、フィリピンではマングローブ林に由来するカーボンクレジットのガイドラインが未確定なため、両社はクレジット化に向けた各種調査を始める。取引先企業は、東南アジアの他国で実績がある手法などを参考にしながらマングローブ林での推定炭素蓄積量の測定・算定方法の確立に取り組みとし、外部企業とのアライアンスも視野に入れる。

カネパッケージはフィリピン政府機関との交渉や現地での植林管理などを担うという。カネパッケージの取り組みが関係企業の環境への意識を刺激し、賛同のうえCSR活動の輪はどんどん広がっている。

現在までに植林本数は1500万本を超え、今後はほかの地域への植林活動も引き続き行う予定だ。

れ、社会貢献支援財団の安部昭恵会長や大分工業高等専門学校生徒や教師が参加するなど世間からの関心を集めている。また「クリスマスボランティア」も活発で、毎年クリスマス時期になると、社員がサンタクロイスになってフィリピンの子どもたちにプレゼントを配る活動も継続中だ。

「驚きと感動をあたえる」をモットーに本業を手がけてきたカネパッケージが、CSR活動を本格化して約20年。これからの数十年先を見据えて「活動の輪」を広げていく。

